

# カントウータ

## Cantuta

## No.3

平成 14 年 5 月発行  
(社) 日本ボリビア協会

### 役員会からのお知らせ 協会メールアドレスの取得 asonibol@lily.ocn.ne.jp

当協会もメールアドレスを取得しました。御意見、御要望などをお寄せ下さい。また、会員の皆様でメールアドレスをお持ちの方は、是非とも当協会までメールをお出し下さい。お持ちの方へのご連絡は、今後メールで行う予定です。

### 15 年度会費納入のお願い

定期総会に先立ちまして、会費の納入をお願い致します。詳しくは別添の用紙をご覧ください。

### 人事消息 南坊進策氏逝去

2002 年 7 月、外務省書記官として長らくボリビアに勤務され、移住者援護に務められた南坊進策氏が逝去された。

### サンフアン日ボ協会新役員

2002 年 12 月 10 日の臨時総会において、次期会長に本田匡四郎氏が就任することが決定した。また、副会長には守田将臣氏が、理事には上田貞道、徳永伸一、早田悦男、大塚和正、前田明の各氏が就任した。(今村忠雄氏提供)

### ボリビアの話題

#### サンタクルスに遊園地

サンタクルスから北へ 11km (ビルビ

ル国際空港近く) にボリビア最大の遊園地がオープンした。10ha の敷地に 1000 台収容の駐車場、水泳遊戯施設、ジェットコースター、お化け屋敷など 75 種類のゲームが設置されている。家族で一日中楽しめる新しいレジャー施設の入場料は、一人当たり \$ 3.99。

### カントウータと CAICO NEWS の 相互交流!

渡邊英樹

(日本ボリビア協会専務理事)

JICA 日系社会青年ボランティアの佐藤朋子さんより当協会機関紙「カントウータ」の記事を CAICO NEWS へ転載したい旨の許可願があり、2 月の役員会でこれを快諾することに決定しました。併せてボリビア日系団体においては記事の出所を「カントウータ」と明記して頂ければ各機関紙において記事の転載を許可することと致しました。同様に当協会も出所を明らかにして CAICO NEWS 等の記事を転載させて頂くこととなります。

### 警官と政府軍との間で銃撃戦 14 人死亡

毎日新聞 HP 2 月 13 日

ボリビアからの報道によると、同国最大の都市ラパスの大統領官邸付近で 12 日、反政府デモの取り締まりを放棄した

警官と政府軍との間で銃撃戦が起き、少なくとも警官や兵士ら 14人が死亡、100人が負傷した。前日に賃上げ要求を政府に拒否されていた警官らは新たな所得税法案への反対を表明していた。サンチェス大統領は 12 日夕方、混乱収集のため法案を取り下げると発表した。

ラパスでは 12 日朝、所得税法の改訂などに反発した学生らが大統領官邸に向け投石を始めたが、地元警察約 1 万人は出動要請を拒否。代わりに派遣された政府軍が学生らを催涙弾で攻撃する中、警察と軍との戦闘に発展した。

## ゴンサーロ・サンチェス・デ・ロサーダ大統領の新内閣

EL DEBER 2月 20 日

2月 12日にラパスで起きた衝突と社会混乱の責任をとって、18日、サンチェス大統領の内閣を構成する大臣 18 名全員が辞表を提出、新政権発足後 6 ヶ月で内閣の改造が行われた。辞表提出後 2 日目に新しい顔ぶれが発表された。

昨年 8 月 6 日の内閣発足時点では、18 省あったが、13 省プラス大統領府代理に改正された。

- 1) 外務大臣 カルロス・サーベドラ・ブルーノ MIR 再
- 2) 大統領府大臣 ホセ・ギリェルモ・フスティニアノ MIR 移動
- 3) 大統領府代理 カルロス・ピレイラ・メンデス MIR 新
- 4) 内務大臣 イェルコ・クコク・デル・カルピオ MIR 新
- 5) 国防大臣 フレディー・テオドビック・オルティス MNR 再
- 6) 財務大臣 ハビエル・コンポニ・サリナス MNR 再
- 7) 経済開発大臣 ホルヘ・トーレス・オブレーアス MNR 再
- 8) 教育大臣 ウーゴ・カルバハル・ド

- ノーソ MIR 新
- 9) 厚生大臣 ハビエル・トーレス・ゴイティア MNR 再
- 10) 労働大臣 フアン・スピナラ UCS 新
- 11) 農業大臣 アルトゥーロ・リエルベルス MIR 再
- 12) 持続開発大臣 モイラ・パス・コルテス MNR 新
- 13) 住宅大臣 カルロス・モラレス・ランディバル MNR 再
- 14) 石油大臣 フェルナンド・イリャネス MNR 再

なお、なくなった省庁は貿易省、農民生省、自治体開発省、法務省、金融省。

## ボリビア、20 年前より貧しい

EL DEBER 2月 2 日

「対立の舞台」と題して「地球ファンデーション」で発表されたゴンサーレス・ロハス・オルティス氏の報告によれば、ボリビアは 20 年前より貧しくなっている事がデータに現れている。この調査によると、国民一人当たりの国内総生産の成長率が 1.7% であるのに対して、人口増加が 2.3% となっており、これは経済的に貧しくなっている事を示しているという。

国連開発計画が算出した収入に占める医療費と教育費の割合で見ると、ボリビアは南米で最も低く、90 年には 130 カ国中 82 位だったが、現在では 162 カ国中の 104 位に落ちている。

選挙管理委員会の元会長ルイス・ラミロ・ベルテラン氏の調査でも、ボリビアの経済の低迷が確認されている。

また、1994 年の公式データによると、受けている国際援助は国内総生産の 11% にも上がっており、近隣国の中で最も率の高いパラグアイの 1.3% を大幅に上回っている。

## コパカバナの聖母

(以上、ボリビアの話題は「ABJ通信」  
(サンフアン日ボ協会発行)第2号から  
取らせて頂きました。)

林屋永吉  
(元スペイン大使)  
(元ボリビア大使)

### 石油大臣の交代

3月19日、イリヤネス石油大臣が、行政機構政策法案に向けた石油省内の改革に反対して辞任した。

3月21日、ホルヘ・ベリンドアゲ・アルコセル、エネルギー担当大統領顧問が、新石油大臣に任命された。

### クーデター計画についての大統領の発言

3月28日、サンチェス大統領は、コチャバンバ市で、「1日のコカ農民グループによる道路封鎖、2日の暴動及び国軍中佐等によるチリの港を通じたボリビア産天然ガスの輸出に対する反対宣言は、クーデターのために計画されたものであったが、これらの計画が失敗に終わったため、クーデターは起こらなかった」と述べた。

この大統領発言について、モラレスMAS党首は、クーデターに関する情報は、MASの代表者を迫害、脅迫するために、外国の代表者に政府との間で作られたものだ、と述べた。

### CAFのボリビアへの融資

3月11日、CAFはベネズエラのカラカスで開催された第113回理事会において、ボリビアに対し持続的な経済再活性化のための財政部門強化等を目指して124百万ドルを返済期間10年(据え置き2年)の条件で融資することを決定した。

### 会報名の由来

カントウータはボリビアの国花。低地に咲く花で、花弁は赤、花弁の付け根は黄、茎は緑でボリビア国旗と同じ色。誰にも愛されるこの花は当協会誌の名にふさわしく、名づけました。

コパカバナと言えば、誰もがブラジルのリオデジャネイロの海岸を、そして毎年この海岸を中心に繰り広げられる絢爛豪華なカルナバルを連想するのが普通だろう。しかしコパカバナというのは元々、アンデス山中のチチカカ湖畔にある人口約6000の村の名前である。いかにもスペイン語らしい響きを持つ名だが、語源はこの地域一帯に今も住む原住民の言葉アイマラ語で、クオタ(湖)とカウアナ(展望台)が結びついたものだ。その名が示すとおり、コパカバナは眺望絶佳、チチカカ湖畔の最も美しい村である。

チチカカ湖はペルーとボリビアの両国に跨り、広さは8300㎡と琵琶湖の12倍、高さは海拔3810mと富士山頂より高く、航行可能な湖では世界最高の大湖である。そしてこの湖畔には南米大陸では最も古いティワナコ文化が発達したし、インカ帝国もこの湖から発生した。インカ帝国の創始者マンコ・カパックとママ・オクリヨの夫婦が誕生したという太陽の島は、インカにとっては創生の聖地であり、少し離れた月の島には太陽神に奉仕する何百人という乙女が居住していたということだが、いずれもコパカバナの村の丘から眺めれば眼下に横たわり、小舟で行っても小一時間の距離にある。インカ帝国華やかなりし頃は、首都のクスコをはじめ版図の各地からアンデスの山々を越えて、太陽の島に詣でる巡礼がこのコパカバナから絶え間なく船出していた。インカにとって正にコパカバナは至高の神に参ずる前の齋戒の地であったし、帰途の休息の場でもあった。その昔には恐らく、金銀で飾り立て

た神殿がその偉容を誇っていたに違いないが、今では村の周辺に散在する巨石や遺構から往時を偲ぶ他はない。

スペイン人は新大陸の各地に金銀を求めたが、同時に原住民にその「邪教」を棄てさせることを大きな使命としていたから、征服地ではあらゆる偶像を破棄し、神殿を破壊してその同じ場所に十字架を建て、教会を建立していった。コパカバナにあったという大きな神像も神殿も完全に破壊されて、そこにはコパカバナの聖堂が建てられた。この聖堂は元々はそれほど大きなものではなかったが、1583年にここに安置された聖母像の、病が癒えた、難破から救われた、事故から免れたといった幾多の奇蹟が次から次へと伝えられるに及んですっかり有名になり、一躍この地域第一の信仰の対象となって、1614年には壮大な聖堂が建設されるに至った。靈験あらたかな聖母の評判は周辺のみならず、新大陸全体に及び、更にはスペイン本国にも伝わって、当時のスペインの最高の劇作家カルデロン・デ・ラ・バルカ(1600-81)までが、「コパカバナの曙」と題する宗教劇を書いたほどであった。

ところが、このような厚い信仰の的となった聖母像は、当時の習慣であったようにスペイン本国から招来されたものではなく、現地で作成されたものだった。それどころか、スペインの征服時にコパカバナに居住していたインカの貴族の末子ティト・コバンキが竜舌蘭の幹で作ったものだった。当時新大陸ではインディオが聖像を作成することは禁止されていたとはいえ生粋のインディオの作った聖母像を聖堂に安置することなどは当初は思いもよらぬことだったが、土地の娘を思わせる浅黒い肌の聖母、左手に抱える幼いキリストの路傍のインディオにも似通った顔に魅せられた住民たちあげての要望とあって、宗教庁も折

れ聖堂の脇陣に安置することを許可した。それはやがて本堂に移されて大聖堂の中心となり、今やボリビアの守護聖母となっている。

インディオたちはこの聖母に、彼らの母なる大地の神バチャママを見ているのかもしれないが、ともあれ信仰は全国の人種、階層に及んで、1983年にはこの聖母の安置400年記念祭が盛大に催された。

リオデジャネイロの海岸にあったミセルコルディア聖堂にコパカバナの聖母が祀られたのはいつの事だか正確には判っていないが、1638年の記録に既にその名があるというから、17世紀初頭のことであろう。一説にはリオ沖で難破した船の一乗組員が聖母にかけた願の成就を感謝して奉祀したといい、他説では当時ポトシー銀山との取引に当たっていた商人が道中の安全を願って祀ったともいう。その真相は明らかではないが、いずれにしてもチチカカ湖の聖母がリオの海岸に勧請され、その名がこの地名の名になったことだけは確かなようである。

リオのカーニバルが世界にその名を馳せているのも、うかれ踊る美女たちのおかげではなく、案外この聖母のおかげながらのご利益によるのかもしれない。

## ティワナク再訪(その1)

### 30年ぶりのボリビア

大貫良夫

(元東京大学教授)

(リトルワールド博物館長)

(現在ボリビアにて遺跡発掘調査中)

2002年8月21日、ペルーのリマから飛行機に乗り、一度サンタクルスに飛び、そこで乗り換えてラパスに着いた。ペルーでなれているつもりであったが、やはりエル・アルト飛行場は高い。ユネスコ

のイブ・グブライエ氏が出迎えてくれて、その車でラパスのメインストリートに面したホテル・プラサに入ったのはいいが、軽い頭痛がする。ラパスの第1日目は何もしないことが肝要、仕事は明日の朝からとイブさんに言われて、しばらく横になる。同行は埼玉大学の加藤泰建教授とペルーの考古学者エリアス・ムヒカの二人、加藤君はもう25年以上の研究仲間であり、エリアスとも20年余りのつきあいである。

数年前から日本はボリビアのティワナク遺跡保存計画に協力したい意向を持っていたとのことである。幸い、日本のユネスコ信託基金でボリビア用に予定したものがあるので、それを計画に使えるのではないかと、ついにはその実現に向けての第1歩を進めようということ、ユネスコ本部とボリビア事務所、ボリビア政府、日本の外務省などが意見を一致させて、われわれ考古学研究者の出番となった次第である。

さて、以前ボリビアには来たことがあったが、あれはいつのことだったか。はじめて来たのは1963年11月で、考古学関係の役所に行った日の昼前、案内してくれていた日本大使館付きのボリビア人女性が、涙を流しながらよろよろと部屋から出て行った。アメリカのケネディ大統領が暗殺されたというニュースを聞いたとのことであった。そのときボリビアやラパスで人々はどのような反応をしたのか、残念ながらまったく記憶が残っていない。その後、私と仲間はサンタクルスまでジープを運転して往復し、それからペルーのタクナに下り、南海岸をリマまで帰ったのであった。ケネディ暗殺のことはすぐに忘れてしまったように思う。

その3年後の1966年、ラパスにもう一度来た。このときもまた陸路でデサグアデー口の橋を渡ってペルーからボリ

ビアに入った。車の衝突、徹夜の運転、ペルー税関の意地悪など、次々と難題が持ち上がった末に辿り着いたラパスであった。このときのことを書くには長大な紙数が必要になるので、今は書けない。とにかくこれが最後のボリビアだったから、あれから29年が経っている。凡そ30年ぶりのボリビアである。

それにしても妙な気持ちである。自分の中では10年くらいの空白という感じなのである。30年前などという昔が自分にあるとは思えないのである。確かにラパスは人も車も昔の記憶とは比較にならないほどに増えていた。エル・アルトの町は何という変わりようだろう。大都市ができていた。昔は電気もなかったのではないかと、真っ暗で、それだけにラパスへの下り道であの町の灯りが盆地の底に突然現れるのを見て、みんなが歓声を上げたのである。それでも、である。それでも、30年の間にすっかり変わったというラパスではなかった。それもあって空白の感覚が10年くらいですんだのかもしれない。いや、それとも、過ぎた時の自覚とはそんなものなのかもしれない。

翌日は朝食を食べながらの会合で、関係者が顔を合わせた。文化担当の女性副大臣、観光担当の副大臣、ラパス県知事、ボリビアの考古学者2名とアメリカの考古学者ヴラニッチ、ユネスコ、日本大使館、そして我々。ティワナクへの日本援助の期待は非常に大きく、各人の思いこみが強く、今回のユネスコ計画には収まりきれないような夢も語られる。できるのはこれだけですと決まったときの反作用が障害とならぬようひそかに祈るのみである。

午後は考古局でティワナク全般の現状を説明してもらい、「ベネットの石彫」の移動の記録ビデオを見た。高さ4m

余りの大石彫をラパスの町から、ティワナク遺跡内にできた新しい博物館へと5月に移設したのである。昔とちがってクレーンや大きなトレーラーを使ったので、作業自体はどうということはない。面白かったのは、遺跡までの沿道に大勢の人たちが集まり、石彫の後に続いて遺跡まで行進をしたことである。大部分はアイマラ民族の農民達である。国が集まれと声をかけたわけでもなく、運搬の日を大宣伝したわけでもないという。巨大な石の人物像はティワナクに戻ることによって、アイマラの人々にとっての新しい意味を持つことになったようである。ラパスでは小さな広場に立っていたとはいえ、粗末に放置されていた状態であったが、今度は大きな広間の中央にただ一人、神像のように佇立する。昔の威厳と神秘を回復した。

午後少し遅く、副大統領のカルロス・メサ氏を訪ねて挨拶をした。偉丈夫である。政府はティワナク保存に大きな関心を有しており、ユネスコ・ミッションを歓迎すると、張りのある声で言われ、頼もしい感じであった。(続く)

## ボリビアで活躍する日系人

### その1の3

#### 故郷と異郷

細野豊(詩人)

ペドロ・シモセが、1971年にボリビアの軍事政権との軋轢からスペインへ亡命し、その後は今日に至るまで、ずっと首都マドリードに家族とともに暮らしていることは、「カントウータ」No.1で述べたとおりですが、1996年にボリビアのサンタクルスで発行された詩集「リベラルタとその他の詩」(Riberalta y otros poemas)には、異境(30年以上も住み、夫人や子供たちにとっては故郷であるスペインも、この詩人にとっては異境な

のではないかと、2000年10月に来日した際の彼の話振り等から感じられました)にあって、生まれ故郷リベラルタを想うこの詩人の深い心情が、抑制の効いた言葉で表現されています。

この詩集は、故郷リベラルタを題材にした18遍の詩からなっていますが、今回はその中から「墓地にて」という詩を紹介します。この詩には、正に異郷であるリベラルタの地に骨を埋めた詩人の父下瀬甚吉氏をはじめとする日本人移住者たちへの深い哀悼の念が謳われており、詩人自身もまた「いつの日か私もあなたたちようになる」と異境に埋葬される予感が表現されています。

#### 墓地にて(細野豊訳)

我々をすり減らし疑い深くさせる時間は  
もう私の中にはなく、芸術の中に生きている。  
穏やかで優しく、悲しみから解放された  
土地に、  
孤独の中の不安なあれこれの行き来の中に生きている。

過去はこれらの墳墓の中に存る。  
私がいつか私の沈黙で傷つけた友人たちや隣人たちの中に、  
ついに知り合わなかったかけがえのない人たちの中に、  
遺体が霊廟に納められることのなかった貧しい人たちの中に、  
自分の名前を書くことさえ習えなかった移民たちの中に、  
自分自身から逃れ、密林の中で朽ち果てたあの人たちの中に、  
道に迷ってしまった思い出の清算の中に存る。

私があなたたちを訪れるとき、

私は訪れることで自らを癒すのだ。  
愛する無名の人たちよ、この上なく愛しい空無よ、  
いつの日か私もあなたたちのようになる  
その時、男か女か、  
感傷的な誰かが  
私と話をしに来るだろう。  
私の墓に思いを巡らせ、一枚の紙の中に  
風がつくるメロディーの中に、  
雨に濡れた菊の匂いの中に私を感じる  
だろう。

私は誇り高く個性が強いが、  
誰かが来て、私の墓に近寄り、私に向かって言うのだろう、  
多くの熱意と敵意の果てに、  
情熱と傲慢に身を焦がしたこれらの骨は  
きみを愛しつづけていると。  
自分たちの愛は  
侮辱と忘却の彼方で  
きみを支えつづけていると。

## じゃがいもの旅の物語

### インカからジパングまで

#### その3

杉田房子（旅行作家）

息せききって口もきけない飛脚の若者が、首に下げていた袋を村長に渡す。口を開ける手元を見つめていた村人がざわめいた。

「キープだ」

文字を持たないインディオは、数をキープという結縄で示した。結び目のこぶが物の数である。多すぎたり複雑すぎると、こぶに枝縄を垂らした。物の種類があまり多いと、縄に色付けして区別する。「金銀、毛皮、それにパパスとチュノ」  
村長は、黙ってキープを読んだ。  
「金銀に毛皮などは構わんが、チュノま

でこれ程となると、村は総ざらいになる」

キープを読み取り、自分でも結べるのが村長の資格の一つだった。長老も全員ができるわけではないし、普通の村人は全然分からない。けれどキープが来たのだから捧げ物をしなければならず、それも容易な数ではない推測はつく。結び目の数を黙々と確かめる村長の姿に村人は息を殺した。

「それを、若くて丈夫なラマに積み、太陽の祭の日までに山裾の町へ運ぶこと。さもなくば、白い肌の人ピラコチャが攻めてくる。」

飛脚が、息をあえがせながら途切れ途切れに伝言した。

「ピラコチャが攻めてくる?? だって」

じゃがいも踏みの畑から男達を追ってきて、遠巻きに見守っていた女たちの中で、年嵩の女が囁いた。悲鳴を押えていた女たちの呻きに男たちが振り返り、村長が沈黙を破った。

「これから、村の長老会議をやる。お前たちはパパスとチュノを広場に集めるのだ」

飛脚の介抱と、長老を集めるのを命じて、村長は神殿の正面に当たる家に入った。そこは神殿の社務所であり、村役場であり、議会であり、裁判所であり、共同貯蔵庫であった。神殿が太陽の神に通じているのなら、この家は村人の暮らしと結びつき、アンデスを支配するインカの皇帝につながっている。

戸口の他は窓一つないアドベ壁に囲まれ、草葺きの屋根と床の土間とがむき出しの造りは、村の家と同じだが、土間には村長と長老の座る床几が並んでいた。村人には、見ただけで重々しい床几の列が集まった長老で埋まると、村長はキープをかざし、飛脚の伝言を伝えた。「チュノまで持っていられるのじゃと」「来年まで食べつなげるじゃるか」

長老の呟きに、村長が低い声で言った。  
「チュノは一つでも少なくする工夫をせねばな。だから-----荷を運ぶ隊は、わしが宰領していく」

今度は長老も叫んだ。

「村長が行く-----。後はどうする。騒ぎが収まらなかつたら、村はどうするのじゃ」

「長老は、万一のときの備えをしておいてもらいたい。避難する場所を決め、食物を隠しておく。それも一ヶ所だけでなく」

村長は口を閉じた。長老は沈黙した。長い長い沈黙が、薄暗い家の中を満たした。ほの白い明かりが差し込む戸口から、村人が広場に運んでいるじゃがいもの日向くさい土の香りが、アンデス山地の澄んだ微風に乗って漂い流れ込んできていた。

灯がともったその夜の村は、収穫が終わってから、一番静かな晩になった。

灯は乾かしたラマの糞に火を移したもので、インディオはサキエと呼ぶ。草木が乏しいアンデス山地では、燃料であり灯でもあった。近い親類が家を隣り合せて住む村では、主だった身内のものの家で、燃料と灯の儉約に夕食を一緒にとる。楽しみの少ない山村で、それはまた娯楽の一つでもあった。

素焼きの土器がせいぜいの食器では、器のかち合う音こそないが、男たちは壺からトウモロコシ酒を飲んで話し込む。じゃがいもとラマの乾肉を煮込んだチャルキというスープを、女たちは土鍋からすすっては噂話にふける。トウモロコシと唐辛子と豆と菜とをとるとろに煮たモチ粥を、子供たちはむさぼり食べてはふざけ散らす。普段は騒々しいのに、この夜はさすがに静かに過ぎていった。

## 37 カ月間のラパス勤務(その1)

### 心に残る神々しいイリマニ山

杉山光男

(JICA 中部国際センター)

今から約 13 ヶ月前の 2002 年 2 月 13 日に約 37 ヶ月間のラパスでの海外勤務を終え成田空港に到着。今、あの時の 37 ヶ月間を思い出している。エルアルト空港に到着し、また、そこから成田空港に向かって飛び立つまでの間、ラパスで生活し、そこで感じたことを旅行記風に断片的に書いてみると・・・。

#### 1. 世界一高い国際空港に到着。高山病の症状に見舞われる。

成田 ロス サンパウロ サンタクルス ラパス。都合 30 時間という赴任の長旅が終わると同時にそこでの我々の生活がスタートした。エルアルト空港は富士山より高く、標高 4000m に位置する世界一高所にある国際空港だ。南米勤務はこれが 4 度目。が、こんなに高く空気が希薄な所での勤務は初めて。不安が過ぎる。入管・通関審査を済ませ空港口ビーに出る。高所のうえに長旅と睡眠不足と時差で体調は余り優れない。心なしか心臓がドキドキ。軽い頭痛や胃のムカつきもある。足が地に着かず身体がフワア～と心もとない。出迎えのスタッフが、「ユックリ歩いて。頭は下げないで。日本式挨拶はしないで。水分を沢山摂って。」と、早速高地での生活術の一端を教えてくれた。空港・ホテル・事務所には「酸素ボンベ」が常備されている。幸いこれのお世話にならずに済んだが、高を括り高山病対策の薬を服用してこなかったことが悔やまれた。これからここでやっていけるのかなあ？

#### 2. 窓の外に雲が流れている？

ホテル暮らしを 2 週間ほどしたあと 25



階建てマンションの20階に住居が決まった。時期は雨期。朝起きて窓の外に目をやると何となく其処に雲が流れている。霧ではない。紛れもなく雲だ。なんと高い所で生活しているのだろう。高貴な出でもないのに我々はラパスで「雲上人」になった。

### 3. 霊峰イリマニ

ペルー・チリと国境を接しているボリビアの西側は6000m級の山々が壁のように連なるアンデス山脈だ。その1つに霊峰イリマニがある。万年雪を抱くこの山はラパスのシンボルでもあり、そこの人々がこよなく愛する。市内至る所から望むことが出来、我々は毎朝毎夕毎晩、寝室やキッチンからその神々しい山を拝んで生活していた。太陽が移動するに伴い、陽光を受けた山肌の色が微妙に変化。特に夕暮れ時は山肌が赤からピンク、橙、藍、紫、鼠と刻々と変化。何とも美しかった。また、時期によっては盆のようにまん丸で大きな満月が丁度イリマニ山から昇る。月光に照らされて青白く光るイリマニ山のなんと幻想的で神々しかったことか。時の経つのも忘れ飽かずに眺めていた。

### 4. 食べ物

ラパス市内には日本食レストランが3軒。ラパス日本人会館の中にある「ふるさと」、ゴルフと麻雀が強いママさんと日本で料理修業をした息子さんが切り盛りする「わがまま」、今でも金鉱山を掘り当てる夢を抱いている主人が経営する「ニュー・東京」の3軒だ。仕事柄、関係者には「郷に入れば郷に従え」式の偉そうな言葉を吐き、自分でもそれなりにボリヴィア食を美味しく頂いたが、やはり日本食が食べられることは嬉しか

ったし、助かった。特に、赴任当初、体調が思わしくなかった時、仕事帰りに仲間と一杯飲む時、正月という日本人にとって特別な意味合いがある時等に、慣れ親しんだ日本食が頂けることがどんなにか嬉しかったことか。標高3600mの高地で沸点も充分でない状況で美味しい日本料理を作って食べさせて貰ったことに今でも感謝している。厳しい環境の中で左程のストレスも感じないで37ヶ月やって来られたのもこれら日本食レストランのお陰だし、また、日本食材を提供してくれている現地日本人社会の人々のお陰と、改めてムーチャス グラシアス。(続く)

### ボリビアの味サルテーニャ

田中ネリ (CGBJ)

カオル・コシオ (レシピ担当)

サルテーニャはボリビアの地を踏んで一度も口にしない事はないというほどポピュラーな「料理」である。料理という言葉を取って括弧内にしたのは、サルテーニャはメインディッシュではないからである。しかし、これ抜きにボリビア料理を語ることはできない。

朝10時、オープンから出たてのサルテーニャを喫茶店の席に座って食べるのもいいが、やはり公園で立ち食いするのが「通」の食べ方ではないか。パリッとした生地を一噛みすると中から熱い汁が出て、アヒーの辛さが効いたじゃが芋と肉と卵とオリーブが醸し出すハーモニーに出会う、それほど食欲をそそるものはない。

サルテーニャ、場所によってはエンパナーダは、ボリビアのほぼ全土で食され、主な具として牛肉か鶏肉が使用され、前日から仕込む事により中身の汁をゼリー状にして生地内に入れる事ができる。それほど馴染みの深いサルテーニャだ

が、その由来は定かではない。1999年5月16日のラ・ラソン紙によると、サルタ地方の女性（salteña）という綽名が名前の始まりだという。その説によると20世紀初頭、後にマヌエル・イシドロ・ベルス前大統領の妻となったフアナ・マヌエラ・ゴリティはアルゼンチン北部のサルタ地方の出身で、ロサス暴君によって家族と共に亡命を余儀なくされてボリビアのタリーハ地方にたどり着いた。全財産を失ったゴリティ家は生活費のためにヨーロッパの汁入りのエンパナーダを作って売るようになった。そのエンパナーダは大変売れるようになり、後にタリーハの伝統的な料理として名乗られるようになった。当時、そのエンパナーダを売るのはマヌエラであり、近所の親は子供に「サルタの娘（salteña）から買ってきて」というように言付けたところから、何時の間にかマヌエラの名は忘れられ、綽名だけが残されたのだという。

最近日本でもサルテーニャが食べられるのはご存知だろうか。神奈川県平塚市に住むカオル・デ・コシオさんは長年サルテーニャを作っており、今回その作り方を教えて頂いた。

私は何度かサルテーニャを作ってみたが、生地に穴が開いて汁が流れ出てうまくいかない。数年前、カオルさんのサルテーニャに出会い、一瞬のうちにまるでラパスのイリマニ山が見えてくるような思いだった。それほどまでに味覚がその国の思い出と繋がっているのかと驚いたものだ。

ボリビアを愛し、サルテーニャが懐かしい皆様に、カオルさんのレシピで是非一度作って頂きたい。カオルさんのサルテーニャを味見したい方は0463-24-3759に注文することができる。

### サルテーニャの作り方 中身の材料（30個分）

鶏肉	1キロ
じゃが芋	大 5~6個
人参	大 1本
玉葱	大 2個
ゼラチン粉	大匙 2~3杯
塩	少々
胡椒	少々
パプリカ	少々
茹で卵	3個
オリーブ	30個

#### 生地

小麦粉	1キロ
砂糖	大匙 1~2杯
塩	少々
油	少々
水	少々
卵	1個

- 1) 鶏肉は水に浸し、塩と胡椒を少々入れて茹でる。肉をさまし、細切れに裂く。スープはとっておく。
- 2) じゃが芋と人参は中位の犀の目切りで少し硬めに茹でる。
- 3) 玉葱は微塵切りにしパプリカを加え少々の油で炒める。その中にスープを加えゼラチン粉を少しずつ入れて溶かす。裂いて置いた鶏肉、茹でたじゃが芋、人参を加えて味を調える。
- 4) 生地をこね、1個分の大きさにして中に味付けした具を入れ、オーブンで焼く。

### 原稿募集中！

皆様から素晴らしい原稿を書いていただき、おかげさまで紙面は充実しています。ボリビアについての原稿を是非事務局にお届け下さい。字数は多くても少なくても構いません。

### 編集委員

鎌田甲一 杉田房子 細野豊